

長岡税務署長賞

私たちにかけられた、一千万円の期待

長岡市立越路中学校

三年 杉本 寛

夏休みに入る少し前、社会科の先生で、私の担任である先生が言った。「この義務教育九年間にいくら使われていると思う？」周囲で様々な予想が飛び交った。三百万、五百万などまるで競りのような状況になった。私は、多くても六百万くらいだろうと思っていたが、先生はこう言った。「あなたたち一人ひとりにつき、一千万円の税金が使われている。」とても衝撃的だった。小学校では一年につき九十八万、中学校では百十二万円も使われているそうだ。それにも驚いて、つい周りを見渡してしまったが、教科書、机、椅子、黒板、ロッカーなど、目に映るものの値段をすべて考えてみたが、どれだけ多く見積もっても百万円に届くとは全く想像できなかった。

その日からしばらく、頭の片隅にずっとそのことがあったため、インターネットで調べてみることにした。あのときは思い浮かばなかったが、教室にあるもの以外にも、体育用品、理科の実験道具、水道光熱費、教師の給料、部活の運営費用、設備のメンテナンスなど、お金がかかるものがたくさんあり、それらのほぼ全てが税

金でまかなわれていることが分かった。特に水道光熱費は、一般家庭とは全く比べ物にならない金額だそうだ。

調べてみて、実際に一千万円が私に使われていることはよく分かった。ただ、こんなにたくさんのお金を費やして、私たちが学習するために必要なものを与えてくれるのはどうしてだろう。新たな問いが出てきた。

自分なりに数日間考えた結果、ある結論に至った。それは、私たちに期待しているからだ。義務教育を終えて、いつか自分でお金を稼げるようになった時に、一千万円よりもっと多くの税金を納められる人間になってくれる、そして社会に一千万円よりもっと価値のある貢献をしてくれる、そう信じてくれているのだ。国、収入を削って納税してくれる大人たち、そして私の親は私に投資している。「一千万円の期待」を私にかけているのだ。

そして、期待されている私には、何ができるだろうか。まず思いつくのは授業を真剣に受けることだ。大人たちは、生きていく上で絶対に必要なお金を私たちに分け与えているのだ。受け取る側として真剣な態度でいなくてはならない。次にできるのが、未来を考えることだ。行きたい高校、やりたい仕事、将来なりたい人物像。何も決まっていなくても、決まらなくても、考えることが大事なのだと思う。それは税金を教育として受け取る私の責任で、税金を納めてくれた人への感謝でもあるのかもしれない。

だから私は、「一千万円の期待」を背負って学校へ行くのだ。いつかそれを「税金」という形で恩返しできる人間になるために。